

第77回

『女はそれを……』など 作り手の琴線に触れた洋画邦題

昭和53年、アン・ルイスが、それまでの『グッド・バイ・マイ・ラブ』や『ごめんない』の淑やかな少女路線からダイナマイト女性にイメージチェンジした昭和ロック歌謡『女はそれを我慢できない』の登場は、そのシングル盤の派手なジャケットとともに衝撃的でした。

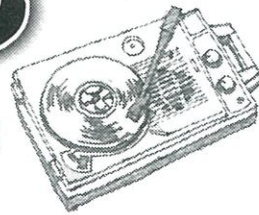
この曲を作詞・作曲したのが沢田研二への提供曲で一時代を築いていた加瀬邦彦です。GSのワイルドワブズ時代でもシングル盤での作詞家としての表記のなかった加瀬でしたが、自ら作詞して名づけた曲名『女はそれを我慢できない』は米映画の邦題からの借用でした(原題『The Girl Can't Help It』)。

なぜ、この映画を加瀬が曲名として採用したのか。昭和32年に日本公開されたこの作品、『七年目の浮気』のトム・イーウェルと、映画初主演のジェーン・マンズフィールドが楽しませてくれるロマンティック・コメディですが、実は、ジーン・ピセント、エディ・コ克蘭、リト

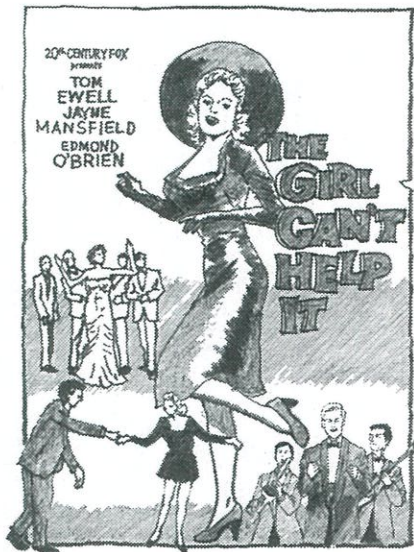
ル・リチャード、プラターズなど、当時のロカビリーファン垂涎のロックンローラーたちが出演、その演奏

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも



堀井六郎
絵 松本 浦



シーンが見られるというのが大きな魅力になっていったのです。

ここには平尾昌章(当時)らが愛したヘアスタイルやハンチングキャップ、寝転びながらの演奏スタイルがありました。第1回日劇ウエスタンカーニバルが開催されるのはこの映画が封切られてから8か月後のことです。

加瀬はその2年前の昭和30年に公開された米映画『暴力教室』を中学生のときに見て興味を掻き立てられますが、映像の少なかつた時代、その後の加瀬少年が『女はそれを我慢できない』に登場する動くロックンローラーたちを見てさらに高揚したかもしれません。アン・ルイスのための新曲を創作した際、慣れない作詞までしたという事は、加瀬にとっても思い入れある映画だったので

しょう。

昭和49年、加瀬は安井かずみとのコンビで『追憶』(同年公開の米映画と同名)を沢田研二に提供していましたが、昭和50年から始まる阿久悠作詞/大野克夫作曲の洋画・洋楽の邦題と同名作品(『時の過ぎゆくままに』『勝手にしやがれ』『サムライ』など)に加瀬が刺激を受け、『女はそれを』をアン・ルイスのために用意したとしても不思議ではないでしょう。すでに阿久悠はそれ以前に『絹の靴下』『お手やわらかに』(夏木マリ)、『渚にて』(いしだあゆみ)、『さよならをもう一度』(尾崎紀世彦)、『昨日・明日・明日』(井上順)など、洋画邦題から拝借した作品を何曲も発表していました。

こうした同名作品を検証するだけでも、作家の嗜好が見えてくるようですが、映画の内容とは別途、昭和40年代までの洋画邦題には日本語として作り手の琴線に触れるサムシング・スペシャルが存在していたのかもしれない。なお、『女はそれを我慢できない』をこれからご覧になる方は、題名にある「それ」について、あまり期待されませんように。